

正弦波電圧・電流のベクトル表現

7. 交流回路 (1)

正弦波交流

- 正弦波交流の瞬時値の式

$$i(t) = I_m \sin(\omega t + \theta_I) \text{ [A]}$$

$$v(t) = V_m \sin(\omega t + \theta_V) \text{ [V]}$$

記号	意味	単位
I_m, V_m	振幅(=最大値)	[V],[A]
ω	角周波数	[rad/s]
θ_I, θ_V	初期位相($t=0$ での位相)	[rad]

- 初期位相の正負を進み/遅れと呼ぶ。

- 「位相」は $\sin()$, $\cos()$ の括弧の中身のこと。

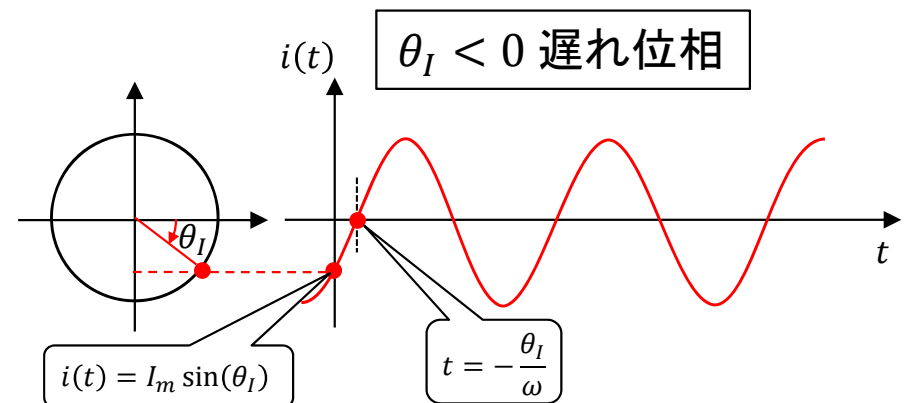
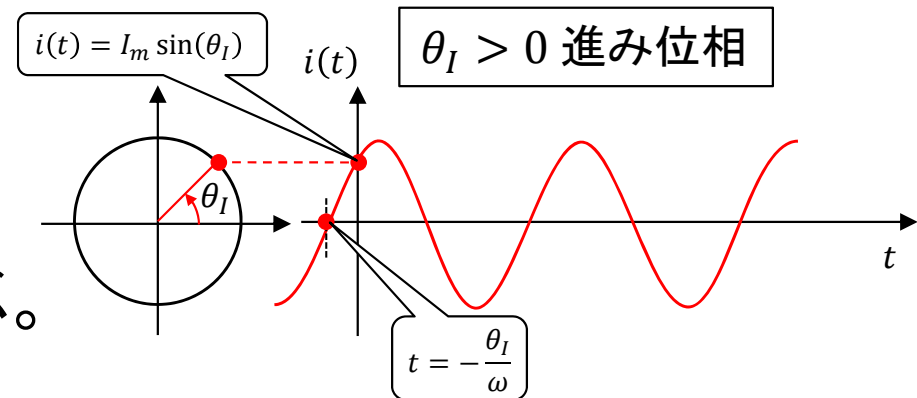
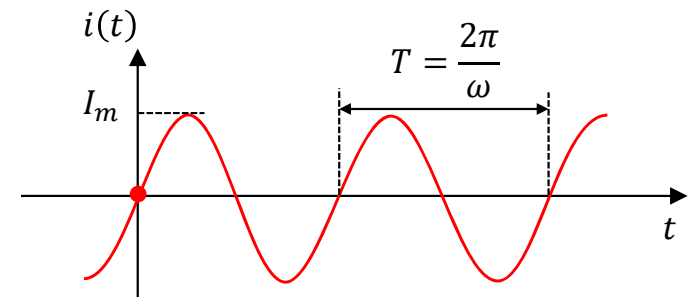
- 位相0の時刻は $t = -\frac{\theta_I}{\omega}$

- θ_I とは正負逆なので進み/遅れの判断には使わない！

- ω と周期 T [sec], 周波数 f [Hz]の関係

$$T = \frac{2\pi}{\omega}, \quad f = \frac{1}{T} = \frac{\omega}{2\pi}, \quad \omega = 2\pi f$$

$\theta_I = 0$ 基準波



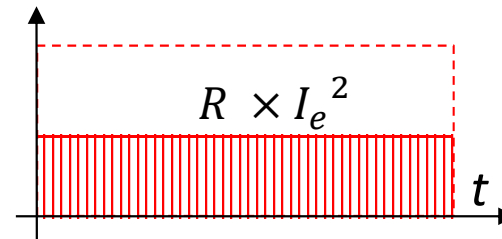
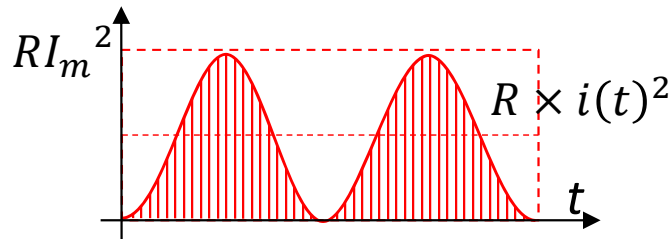
実効値

- $i(t)$, $v(t)$ の二乗平均値 I_e , V_e を実効値と呼ぶ。
- 実効値とは、抵抗の消費電力が等しくなる直流に換算した値のことで、正弦波交流では、振幅 I_m , V_m の $1/\sqrt{2}$ に等しい。

$$i(t) = I_m \sin(\omega t + \theta_I) = \sqrt{2}I_e \sin(\omega t + \theta_I) \text{ [A]}$$

$$v(t) = V_m \sin(\omega t + \theta_V) = \sqrt{2}V_e \sin(\omega t + \theta_V) \text{ [V]}$$

例: 抵抗 R に電流 $i(t)$ を流したときの平均消費電力(1周期分)



$$I_m^2 : I_e^2 = 2 : 1$$
$$\therefore I_m : I_e = \sqrt{2} : 1$$

- 交流で振幅より実効値がよく用いられるのは、**電力計算が超簡単(=直流と同様)になるから。**

例: 家庭の100V電源

$I_e = 100$, $I_m = 100\sqrt{2} \doteq 141\text{V}$, もし3A流れたら300Wとすぐに計算できる。

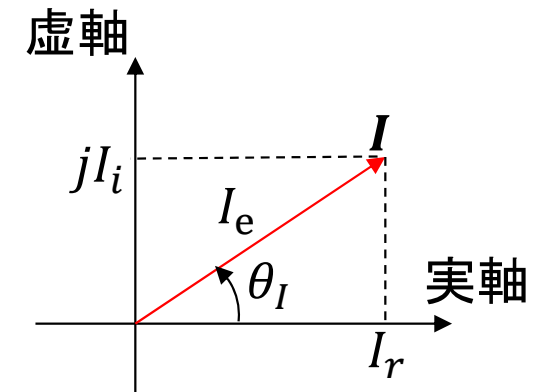
正弦波の複素数表現とフェーザ表現

- 対象回路で角周波数 ω が共通なら、 $i(t)$ を一意に決めるには、 I_e と θ_I の2量さえあればよい。
- 大きさ I_e 、方向 θ_I のベクトル I で表せば、三角関数が消滅(=楽!)
- ベクトル I を複素平面に描くときの表現は2種類
 - 複素数*表現(直交形式)

$$I = I_r + jI_i, \quad I_r = I_e \cos \theta_I, \quad I_i = I_e \sin \theta_I$$

- フェーザ**表現(極座標形式)

$$I = I_e e^{j\theta_I} = I_e \angle \theta_I$$



*電気回路では虚数単位を j で表す。

**フェーザ(phasor) は phase vector (位相ベクトル)の短縮形。

加減乗除の算法はベクトルと同じ。位置ベクトルや方向ベクトルと区別するための別名。

正弦波の複素数/フェーザ表現の例

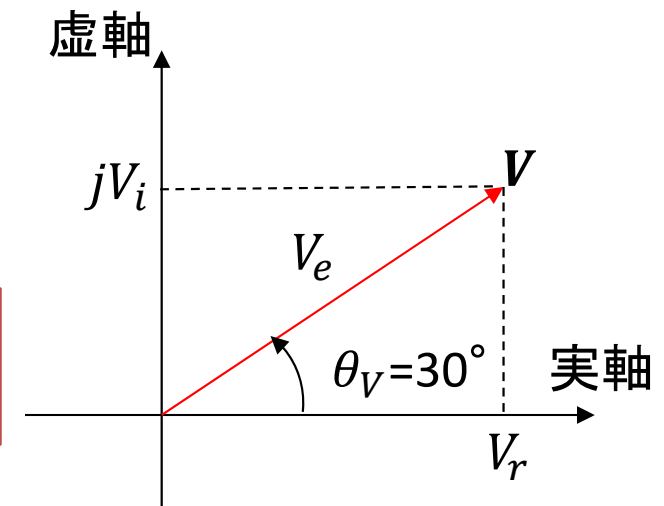
- 例: $v(t) = 100\sqrt{2} \sin \left\{ (2\pi \times 100)t + \frac{\pi}{6} \right\} [\text{V}]$

- $\omega = 2\pi \times 100 [\text{rad}]$

- $V_e = 100 [\text{V}]$

- $\theta_V = \frac{\pi}{6} [\text{rad}] = 30 [\text{deg}]$ (進み位相)

本講義では電気業界での慣用単位 [deg] を使います。



- フェーザ表現

- $V = V_e \angle \theta_V = 100 \angle 30^\circ [\text{V}]$

- 複素数表現

- $V = V_e \cos \theta_V + jV_e \sin \theta_V = 50\sqrt{3} + j50 [\text{V}]$

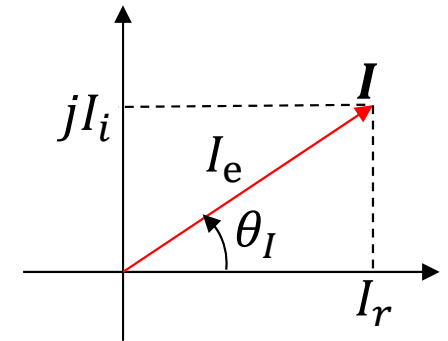
複素数表現とフェーザ表現の関係

- フェーザから複素数へ

$$- I = I_e \angle \theta_I \rightarrow I = I_e \cos \theta_I + j I_e \sin \theta_I$$

- 複素数からフェーザへ

$$- I = I_r + j I_i \rightarrow I = \sqrt{I_r^2 + I_i^2} \angle \tan^{-1} \frac{I_i}{I_r}$$



- 加減算は複素数表現が便利

$$- I_{ADD} = I_1 + I_2 = (I_{r1} + I_{r2}) + j(I_{i1} + I_{i2})$$

$$- I_{SUB} = I_1 - I_2 = (I_{r1} - I_{r2}) + j(I_{i1} - I_{i2})$$

- 乗除算はフェーザ表現が便利

$$- I_{MUL} = I_1 I_2 = I_{e1} \angle \theta_{I1} \times I_{e2} \angle \theta_{I2} = I_{e1} I_{e2} \angle (\theta_{I1} + \theta_{I2})$$

$$- I_{DIV} = \frac{I_1}{I_2} = \frac{I_{e1} \angle \theta_{I1}}{I_{e2} \angle \theta_{I2}} = \frac{I_{e1}}{I_{e2}} \angle (\theta_{I1} - \theta_{I2})$$

まとめ

- 正弦波交流の表し方は、瞬時値 $i(t)$, 振幅 I_m , 角周波数 ω , 初期位相 θ_I とすると、 $i(t) = I_m \sin(\omega t + \theta_I)$ [A] で表せる。
- 実効値 I_e は振幅 I_m の $I_e = I_m / \sqrt{2}$ に等しい。
- 初期位相 $\theta_I > 0$ の波は、基準となる $\theta_I, \theta_V = 0$ の波より、位相が θ_I だけ進んでいるという。
- 角周波数 ω が対象回路で共通とすれば、正弦波交流を直交形式の $i(t) = I_m \cos(\omega t + \theta_I)$ または $i(t) = I_m \sin(\omega t + \theta_I)$ で表すと、三角関数がなくなって楽。
- 複素数表現とフェーザ表現は相互に変換できる。
- 直交形式の複素数表現は $I_m e^{j\theta_I}$ 算に有利で、フェーザ表現は $I_m \angle \theta_I$ 算に有利。

7. 演習問題

1. 瞬時値表現の電圧 v , 複素数形式の電流 I を、どちらもフェーザ表示(極形式)に変換し、フェーザ図を描け。
 - a. $v_a = 100\sqrt{2} \sin\{(2\pi \times 100)t - 30^\circ\}$ [V]
 - b. $v_b = 70.7 \sin(376.8t + 60^\circ)$ [V]
 - c. $I_c = 4 + j3$ [A]
 - d. $I_d = j2$ [A]
2. 次の各行に指定する電圧または電流をフェーザ表示し、フェーザ図を描け。
 1. $I_1 = 2\sqrt{3} - j2$ [A] と、 I_1 に対して位相が 60° 進み、 $|I_2| = 2$
 2. $V_1 = 3$ [V] と、 V_1 に対して位相が 45° 遅れ、実部の値が2である V_2
3. 起電力 $E_1 = 100\angle 0^\circ$, $E_2 = 200\angle 45^\circ$ の合成起電力 E を求めよ。
4. 電流源 $I_1 = 50\angle 0^\circ$, $I_2 = 100\angle -60^\circ$ の合成電流 I を求めよ。